

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

西川喬先生を送る言葉

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福嶋, 教隆, Fukushima, Noritaka メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1526

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



西川喬先生を送る言葉

福畠 教隆

西川喬先生は凝り性だ。当世風に言うなら「何かにハマるとしつこい」^{たち}性だ。柔道、テニス、パソコン、カラオケ、水泳、禁煙の努力…。北海道のご出身なので、水泳には大学教員になってから親しまれ、一時期そうとうハマっておられた。「ボクが初めて泳いだ海は地中海なんだよ」というのが、当時の先生の口癖だった。自他ともに認める愛煙家から脱しようとしておられた頃は、「いやあ、煙草を吸わないと、ほんとに気持ちがいいね」と、いとも朗らかにおっしゃるので、生来喫煙に縁のないこちらまで妙に納得させられるのは、ご人徳のなせるわざだった。

先生のこの気質は、当然のことながらご専門にも強くあらわれ、スペイン語（イスパニア語）の動詞の諸時制の機能と、その学説史を一貫して探究してこられた。はじめは、時制を1つ1つ順を追って丹念に分析を続け、その後は時制に関する古今の学説を読み解き、丁寧に批評を加える作業に従事された。その粘り強さを象徴するのが、多年にわたって集められたスペイン王立学士院（Real Academia Española）の文法書である。18世紀に出た初版から最新版に至る全巻を、原著、複写交えてコンプリートし、座右の書としておられた。先生が時制に「ハマって」、それをライフワークとされた成果は、1988年の『スペイン語時制研究史』や、1995年のマドリード大学博士号取得論文「スペイン語・日本語文法史における動詞時制」（原題はスペイン語）などの形で公にされ、学界に計り知れない寄与をもたらした。

教室でも、細部をおろそかにすることなく、さまざまな問題に丁寧に対応する西川先生の授業は、学生たちから絶大な信頼を得ていた。数々のベストセラー教科書や、2010年刊行の概説書『わかるスペイン語文法』の著者として、神戸外大だけでなく、全国の多くの学習者をスペイン語に「ハマる」道へと導いていかれた。

先生の凝り性は、大学事務運営の面でもいかに発揮され、早くからイスパニア学科の運営の実質的な核となって、さまざまな案件をじっくりと処理してこられた。性急な結論を避け、一見遠回りのようであるが実はいつも本質を見抜いておられた。カリキュラム改革など全学的な問題にもこの手腕が生かされ、解決を見たのは、誰もが知るころだ。

しかし平素の先生は、そのような八面六臂の活躍の才を内に秘めて、冒頭に記したような肩の凝らない話題を気さくに語られるので、先生に接する者は、緊張を強いられることなく、体の中を春の風が吹き抜けるような、何とも言えない穏やかな気持ちになる。

私が初めて先生にお会いしたのは、先生が宮本正美先生たちと立ち上げられたスペイン語の研究会でのことだった。西川先生は、一介の大学院生に過ぎない私を、当初から対等の研究者として遇してくださった。その後、私が本学に勤めることになって、永きにわたって先生の警咳に接することとなった。

六甲学舎では、紫煙たちこめる木村榮一・西川両先生の共同研究室や、その隣の林一郎先生と私の共同研究室で、茅渟の海の輝きを眼下に見ながら、どれだけの思い出深い時を先生方と過ごしたことだろう。時には文法談義に熱くなり、時には将棋に興じる先生方の傍らで取りとめのない会話を続けた。ある日、教授会をさぼってみんなでそういうサロンを楽しんでいると、案件の採決の定数が足りなくなって、人集めのため、教務係のH氏が鐘を鳴らしながら研究室前の廊下までやって来た。一同、あうんの呼吸で息を殺して居留守を使った。今では想像もつかない、のどかな時代だった。

今のキャンパスに移転してからも、西川先生の研究室はサロン状態で、コーヒーをごちそうになるために入り浸ったものだ。また西川ゼミと私のゼミは、合同の飲み会を開くのがいつしか恒例になり、学生たちを交えて先生と酒を酌み交わした。先生のお話では、「いやあ、学生たちは飲み会が好きだねえ。やりましょう、やりましょうって聞かないんだ」ということだったが、西川ゼミ生に言わせると、「合同の飲み会はいつやるんだ、まだかって、先生に迫られるんです」となって、真相は藪の中である。だが、いったん楽しさを覚えると、とことん追究せずにはいられない先生の凝り性を思うと、どちらの言い分に理があるのかは自ずと明らかだろう。

先生の「ハマるとしつこい」性分が最も色濃く出ているのは、実は母校愛だ。神戸外大を、イスパニア学科を、少しでも良くするために、半生にわたって根気強く努力してこられた。私たちはその大きな成果を受け継いでおり、これを絶やすことなく育てていかねばならない。ご退職後は、先生にゆっくりしていただきたいのは山々だが、一方では、本学のさらなる発展のために、引き続き凝り性の天分を発揮していただきたいこともある。

西川喬先生、長い間ほんとうにありがとうございました。そしてこれからもどうぞよろしくお願いします。